
理想体重は80キロ

28号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想体重は80キロ

【Nコード】

N1997BA

【作者名】

28号

【あらすじ】

デブしか愛せないお坊ちゃんに「愛人になれ」と迫られたのは、彼につかえるメイドだった。

1 愛人のすゝめ

「結婚することになった。だから、お前は今日から愛人だ」
まるでそこにある醤油とつて、くらいのノリで、坊ちゃんは私にそう言った。

美しい指で器用に器用に箸を動かし、納豆をかき混ぜている坊ちゃんことクリストファー様は私の雇用主であり幼なじみであり恋人だった。

正直私が彼の恋人である自信はまったくないし認めたくはなかったが、愛人になれと言っくらだから坊ちゃんはそう認識しているのだろう。

「結婚するのはあの、何て言ったかな、前にケントおじさんの誕生日パーティーであつた子だ」

「アンヌ様ですか？」

「ちがう、もつと細くて赤いドレスの」

「ジュエル、キャサリン、リンダ、ナオミ、リリー、ロイス」

この手の問答は非常に時間がかかるため、私は細くて赤いドレスを着ていた女性の名前を列挙する。

すると坊ちゃんはパチンと指を鳴らし「リンダ！」と叫んだ。その手のキザなポーズも、腹が立つほど似合っている。

「そうだ、名前を思い出したら忌々しくなつたきたぞ！ あのガリガリ女はリンダだ！」

「坊ちゃん、レディーに対してガリガリ女はいけません」

「だってみただろああの細い腕と腰、まるでチョップスティックだ」と言いつつ納豆の糸を引く箸を振りまわす坊ちゃんを落ち着かせ、

私はため息をつく。

「いいですか坊ちゃん、あなたはもう27です。そろそろその偏った趣向と性癖と女の子の好みを改めるべきです」

それから私はこの手の話題の締めくくりに使う決まり文句を口に

した。

「お忘れのようですが、坊ちゃんはカンパニーの跡取りなんですか」

途端に、坊ちゃんは無駄に美しく育った顔をこれでもかどゆがめる。

「跡取り息子だろうが何だろうが僕は男だ。なんと言われようと、たたない物はたたないんだ！」

そう言う即物的な話しているわけではなかったが、まあそれも原因のひとつなので否定は出来ない。

「ですが結婚なさるのでしよう。それに跡取りはどうなさるおつもりですか」

「体外受精ですますから問題ない」

本当にすませられる金があるからたちが悪い。

「だから僕は彼女とはやらない。けれどそれじゃあ欲求不満になるだろう、だから僕には君が必要だ」

そういうと、坊ちゃんは誓約書と書かれた紙を私の前に差し出した。

「これからは世話係ではなく愛人になれ。そして僕の体を慰める。

俺の体を男に出来るのは、そのデカイ尻しかない！」

「坊ちゃん、いくら何でもそれは私に失礼です」

「事実を告げることの何が悪い！僕はお前が好きだ、その脂肪まみれの体に丸い顔に太い足！かといって豚のように醜すぎもしない顔はキスするのに最適だ」

だから愛人になれと迫る顔が魅力的でないとは言わないが、勿論ここサインなどするはずもない。

かわりに私は、坊ちゃんに冷静になって頂くべく、彼のかき混ぜていた納豆を無礼を承知で彼の頭にぶちまけた。

「デブ好きも大概にしないと、痛い目見ますからね」

むしろ痛い目を見せてやると決意した私の笑顔に、坊ちゃんは望むところだと肩を怒らせていた。

1 愛人のすゝめ(後書き)

他作のアンケートで頂いておりました「デブ専の彼を矯正」というオーダーより作成させて頂きました。

よろしければお付き合いの方、よろしくお願い致します。

1 / 5 誤字修正しました(ご指摘ありがとうございました)

2 紳士からの呼び出し

「時計を買っならクロックワーク」のCMでおなじみ、庶民からセレブまで幅広い客層を持つ腕時計メーカークロックワーク社の社長、リチャード・クロックワーク。

そんな偉大なセレブの前に坊ちゃんの誓約書を手に立たねばならなくなつたとき、私は本当に胃が痛かつた。

それは別に彼の容姿や人柄が恐ろしいからではない。

穏やかな人柄と時計にかける情熱で社員と顧客に愛されてきた彼のトレードマークは、いつも絶やさぬ穏やかな微笑みで、使用人である私にも彼はいつも優しくしてくれる。

だが問題は、彼がとても優しい紳士であると同時に坊ちゃんの父親である事だ。

「ウチの息子がまた馬鹿なことを言い出したそうだが、大丈夫かね？」

と私を気づかうリチャード様の声はやっぱり穏やかで、逆に申し訳ない気持ちになつてきてしまうのだ。

「別に君を責めている分けじゃないよ。ただ、少し話を聞きたかつただけなんだ」

心得ておりますと私は静かに頷けば、リチャード様は私の肩を気づかうように叩いてくれる。

坊ちゃんと私は、リチャード様と共に彼が有するニューヨークのペントハウスにすんでいる。

故に朝の珍事の詳細を教えて欲しいと、家主であるリチャード様から呼び出されたのはすぐのことだった。

この家には私以外にも7人ほど使用人がいるし、多分その誰から話が回つたのだというのは見当がついていた。

とはいえ皆気が利く者達なので、伝わつた話に無駄な尾ひれや憶測はないようだった。

それに感謝しつつ、私が事の次第を手短に説明しながら誓約書を渡せば、リチャード様は副社長が金を横領したときでさえ消さなかつた笑みを消失させた。

なにせ誓約書には、結婚後はどれくらいの頻度で体を重ねるだの、どれくらいのお金で困ってやるだのという生々しい事項が並んでいるのである。

そして何よりリチャード様は常識的な紳士なのだ。

坊ちゃんの行動を理解するのは酷く困難なことに違いない。

「すまないねリナ、後で私の方から叱っておく」

絞り出すような言葉は苦渋に満ちていて、むしろこちらが申し訳なくなってくる。

「ただまあ、私が言ったところで考えを改めるかどうかの問題だが」
ここでもまた、心得ておりますと私は頷く。

坊ちゃんとリチャード様は決して仲が悪い関係ではないが、恋愛の2文字がつくと、坊ちゃんがリチャード様の手に負えない暴れ馬に変身するのはいつものことだ。

とはいえ別に、リチャード様が多くの金持ち同様、愛人を困つたり家族を無視して羽目を外した反発で、その手の言うことを聞かないというわけではない。

むしろリチャード様は、その手のことに金を使うなら息子と野球を見に行くタイプの方だった。早くに母を亡くした息子を、大切に大切に育ててきた方なのだ。

大切にすぎで、坊ちゃんが異常な性癖に目覚めてしまったとき目をつむってしまったのは問題だったが、リチャード様の努力を思えばそれを責めることも出来ない。

むしろあれだけ変態なのに、有能な跡取りに育て上げただけで快拳である。

あの物言いからは信じられないが、坊ちゃんは恋愛以外のことは酷くまともで、リチャード様の跡取りとして仕事の方もまっとうにやっているらしい。

主にその恋愛面で迷惑をかけられている私にはにわかには信じられないが。

「なありナ、君はこれをどう思う」

日頃の傍若無人な態度を思い起こし、眉の間に深い渓谷を作っていた私に、リチャード様が不意に尋ねた。

「お相手の方に失礼だと思えます」

「他には？」

「リチャード様には申し上げにくいですが、クリス様の性癖には矯正すべきゆがみがあると思います」

そう言う私の体をじっと見て、それからリチャード様は慌ててすまないと目をそらした。

「たぶんその、あの子は無意識に母親の影を追っているのだろう。アンは君に似てとても大らかでふくよかだったからね」

「私はふくよかどころか完全にデブの部類ですよ」

気温が寒くなったせいか、今月だけで2キロも体重が増えているけれどそんな私の腹部を抱きしめるのを極上の喜びとしているのが坊ちゃんである。

「リナの贅肉は世界一だ、この脂肪は絶対に手放さない」と冗談ではなく本気で言ってくるのが坊ちゃんである。

もし雇い主の息子でなければ、本気で殴り飛ばしているところだ。「差し出がましいようですが、クリス様にはその手の趣向を変えるカウンセリングを受けさせるべきだと思います。あのご様子だと、結婚生活が破綻するのは間違いないでしょう」

私の顔に、リチャード様はまたしても申し訳なさそうに私を見る。「そもそもこの結婚の話を了承させるつもりはなかったんだよ。クリスには君がいるし、絶対断ると思って話をしたんだ」

確かに、坊ちゃんの恋愛に口を出したことのなかった彼が、突然彼に相手を宛うのは不自然だと思っていた。

何せはじめて坊ちゃんに告白された15の時から、リチャード様は交際に文句ひとつ言わなかったのである。

あのころから私はまん丸で、いじめられっ子で、セレブだらけの社交場では浮きまくるタイプの少女であったにも関わらず、彼は今の今まで別れると言ってきたことはない。

「ねえリナ、君はどうしたい？」

そして相も変わらず、リチャード様がそんなことを言う。

彼の優しさはわかっているから、彼が何を言わせたいかもよくわかる。

けれどそれに乗るほど、私は女々しくはない。

「クリスマス様が普通の女性を愛せるよう、少し手を打とうと思います」
私の言葉にリチャード様は残念そうだったが、あの子のことは任せると最後は頷いた。

「クリスマスは君に甘えすぎていたしね、これも良い機会かもしれない」

「では多少手荒なことを行っても？」

「好きにしてくれていい、君にはその権利がある」

「ではさっそく、クリスマス様にはデブ断ちをして頂こうと思います」
きっぱりすっぱり言い切れば、リチャード様は酷く不安そうな表情になり、それから躊躇いがちに頷いた。

3 デブ断ちと身辺整理

坊ちゃんのだブ断ち決行を決意した私が始めに行ったのは、彼の身辺整理であった。

ようは、彼の周りにある彼の歪んだ性癖を増長させるアイテムの破棄だ。

エロ本、AV、ポスター、フィギュア等々、坊ちゃんが愛してやまない「オデブちゃん」関連アイテムがその対象だ。

坊ちゃんが出かけた隙に部屋に忍び込んだ私は、ゴミ袋を片手に部屋をざっと見回した。

金持ちだろうと何だろうと、世の男のエロ本の隠し場所というのは古今東西一緒であると執事頭からアドバイスは貰っているので、まず手始めに、私は無駄に大きなベッドのマットレスを持ち上げる。かなり重いけど、デブはデブでも私は動けるデブだ。

相撲取りよろしくマットレスを持ち上げ、私は魔の巣窟の扉をこじあげた。

「うわあ……」

そして後悔した。マットレスとベッドの木枠の間に挟まっていたのは、1冊残らずオデブちゃんが写るエッチな本である。

こういうマニアックな物って結構あるのだから感心しかけたが、特に使用頻度が高そうな枕元の本の間に挟まった自分の写真を見たとき、私はげんなりした。

そう言えば最近、仕事が忙しくてその手のことをしていない。その上彼が望んでも色々な理由を見つけては行為を拒んでいたのだ。別に坊ちゃんの体がいやというわけではなかったが、お互いいい年だし、そろそろ使用人としてのけじめをつけねばと思っていたのである。

その所為で坊ちゃんは「お前の写真をおかずにしてやる！」と馬鹿なことを叫んでいたが、まさか本気でやっているととは思わなかつ

た。

わかっていはいたが変態だ。これは何としても矯正せねばなるまい。

気を取り直した私は、今度こそ魔の巣窟の解体にかかった。

とりあえずエロ本は全て処分、昔私があげた相撲の雑誌も一時的に引き上げることにする。

本当は捨てても良かったが、エロ本と違いベッドの下に隠された箱に嚴重にしまわれていたそれは、まるで宝物のような扱いだっただから、さすがに問答無用で処分するのは忍びない。

とはいえ相手は変態、これをおかずにしだしたら困るので、一般的なエロ本で事をいたせるようになるまでは避難である。

その後、クローゼットの奥やら本棚の後ろなど、ありとあらゆる場所に隠されたデブな雑誌やビデオ等の関連アイテムを全て処分し、最後は様々な場所に散っていた私の写真を回収する。

一緒に写っている物がほとんどだが、私の寝顔などいつ取ったのかと驚くような写真も多い。

今更だが彼の撮った写真を見てみると、ちゃんと女の子として見られていたのだなと少しだけ感動した。

彼は私を好きなのではなく、私の脂肪が好きなのだと思っ
ていたからだ。

なにせ出会ったときの彼は脂肪欠乏症状態だったし、告白されたときも今も、彼の周りにはデブが本当に少ないのだ。

病的なデブ専である一方、坊ちゃんは大手企業の社長子息である。故に彼の周りを取り巻く人々もセレブばかりで、その手の人種にデブは殆どいない。

男子はまだしも特に女子はその殆どがモデル並みに美しく、脂肪吸引を趣味と言い張る者達ばかりだ。

そんな女子達にもにこやかに接してはいたが、勿論それは見た目だけ。

家に帰ると必ず「あんな棒みたいな女にキスなんてしたくない！」

と坊ちゃんが激怒するのは日常茶飯事である。

だから一番側にいて、大好きな脂肪にまみれた私を愛するのは当然のことだった。

彼にとつて、唯一の癒しが私だったのだろう。

そして私は人並みの感性だったから、美しい顔で愛を囁かれてうっかりOKしてしまったのだ。

褒め言葉が酷いことに目をつむれば、坊ちゃんは優しい。デートの時のエスコートは完璧だし、私が食べたいと思ったものは何でも食べさせてくれる。

だから拒む理由はなかった。他に好きな相手はいないし、今後出来るとも思ってたからだ。

その結果、私達はもう10年以上付き合いた。

けれど彼と結婚できるなんて図々しい事は勿論思っていない。私はただのメイドで、坊ちゃんは性癖さえ直れば立派な青年だ。

だから写真を破り捨てていく私の手に躊躇いはない。

映画などでは良く昔の恋人の写真を破るシーンがあるが、今の状況はまさにそれに近い。

だがまだ100枚ほど写真が残っている状態で、予想外のことが起きた。

坊ちゃんが、帰ってきたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1997ba/>

理想体重は80キロ

2012年1月6日16時49分発行